

「無くてはならない、決してあってはならないこと」

奨励	榎本 栄次〔えのもと・えいじ〕
奨励者紹介	日本キリスト教団牧師

乾いたパンの一片しかなくとも平安があれば
いけにえの肉で家を満たして争うよりよい。
成功をもたらす僕は恥をもたらす息子を支配し
その兄弟と共に嗣業の分配にあずかる。
銀にはるつば、金には炉、心を試すのは主。
悪事をはたらく者は悪の唇に耳を傾け
偽る者は滅亡の舌に耳を向ける。
貧しい人を嘲る者は造り主をみくびる者。
災いのときに喜ぶ者は赦されない。
孫は老人の冠、子らは父の輝き。
高尚な唇は神を知らぬ者にふさわしくない。
うそをつく唇は高貴な者に一層ふさわしくない。
賄賂は贈り主にとって美しい宝石。
贈ればどこであろうと成功する。
愛を求める人は罪を覆う。
前言を翻す者は友情を裂く。
理解力ある人を一度叱責する方が
愚か者を百度打つよりも効き目がある。
悪人は逆らうことのみ求める。
彼には仮借ない使者が送られるであろう。
子を奪われた熊に遭う方が
愚か者の無知に会うよりましだ。
悪をもって善に報いるなら
家から災難は絶えない。
いさかいの始めは水の漏り始め。
裁判沙汰にならぬうちにやめておくがよい。
悪い者を正しいとすることも
正しい人を悪いとすることも
ともに、主のいとわれることである。

（箴言 一七章——一五節）

決してあってはならないことに出くわしながら

キリスト教の信仰には、そのシンボルとして十字架があります。それはアクセサリーではなく、とてもグロテスクな象徴です。死刑台なのですから。首つり縄と同じです。なぜそのようなものをシンボルにしているのでしょうか。呪いであり、敗北です。人生に決してあってはならないことです。イエス・キリストは十字架にかかり、私たちの罪を贖ってくださいました。ですからキリスト者は十字架をシンボルとするのです。しかしそれで、私たちの周りから悲しみや苦しみというものが無くなったのでしょうか。そうではありません。キリストの十字架により私たちの苦しみは根本的に取り除かれたのです。苦しみが無くなったのではなく、その苦しみが意味をもつようにされたのです。
私たはできるだけそのような呪いを避け、スムーズに人生を送りたいと願います。ところが例外なしにどの人の人生にも、あって欲しくない十字架が訪れてくるのです。遅かれ早かれ、例外なしに。そうして実はこの決してあってはならないようなことが、無ければならないのです。そうしないと、ちゃんとした人間にならないのです。それでは、困ったことがあった方がよいのかと言うと、とんでもない。決してあってはならないのです。そこから少しでも遠くに離れ、一目散に逃げ出すのです。人生にこんな事があってはならないという事に出くわします。無事に人生が送れたらどんなに幸せでしょうか。にもかかわらずそうならないのが人生であり、だから人生なのです。森田公一の「青春時代」という歌があります。「青春時代が夢なんて、後からほのぼの思うもの。青春時代の真ん中は道に迷っているばかり、胸に刺さすことばかり」と言います。人はこの決してあってはならないことに出くわしながら大きくなっていくのです。それとうまくつき合うことが生きる力であり、人となっていく道程です。優しさはそこにあります。
私はそこそこの人生がいいなと思ってきました。点数で言えば六十点です。一〇〇点満点を取ろうとか、一番になろう、有名になろうなどと考えたことはありません。だからどこかで世間をなめているのかもかもしれません。適当にやっていればいいのだと考えるのです。ところが、そこそこのいうのはとても難しいのです。みんな必死で頑張って、ようやくそこそこののです。なめてかかれるほどこの世の中は甘くないのです。お百姓さんだって、漁師だって、大工さんだって、村役場の人だってみんな必死で頑張っておられるのです。そしてみんなそこそこの生活を勝ち取っているのです。そのことを知らないで甘く見ていたために、私ははじめからそこそこにもなれず、つまずきの連続でした。

一九六〇年代の教会と社会

私は四十年前に、同志社大学神学部の大学院を卒業して、北海道の札幌北光教会の伝道師に赴任しました。当時一九六〇年代は、とても希望に満ちた時代でした。学生はいつも国家のことを考えていました。寮生活をしていても、国会がどうなるかということが一番の関心事でした。ベトナム戦争や日米安保条約のことなどについて、無関心でいることは許されませんでした。
日本キリスト教団では、教会の宣教基礎理論を打ち出していました。その内容は二つあって、一つは、教会の体質改善。もう一つは伝道圏伝道ということでした。体質改善というのは、これまで教会は信仰を心の事柄、魂の事柄についてだけ関心をもってきた。そのために、国家が大きな過ちを犯しているときにそれに目を閉じ、関心を示さず、口を閉じてきた。預言者としての役割を果たせなかった。この世で起きている事柄に対して積極的に関わっていく体質を身につけなければならない。そのようなために教会の考えを変えるだけでなく、体質を変えようというものでした。
もう一つは伝道圏伝道というものです。伝道圏というのは、縄張りのようなもので、自分の置かれた地域のことをしっかりと捉え、共に痛みを担っていくというものです。そこでは教派を越えた協力が必要です。福音の土着化とも言われたのです。それは世界的な流れでもあり、エキュメニカル・ムーブメントと言われました。教会一致運動です。カトリックとプロテスタントがこの世の問題について力を合わせましようということです。目的は自分にあるのではなく、神の宣教に置くというミシオデイが説かれました。ここから共同訳聖書が生まれたのです。
この方針は、とても大きな意味のあるものでした。教会の出エジプトを意味していました。未経験の新しい世界に向かって踏み出したものです。その具体的な取り組みとして「第二次世界大戦下における日本キリスト教団の責任についての告白」が鈴木正久議長の名で出されました。一九六七年のことです。そうして、一九六八年、靖国神社国営化法案が提出されました。教会はこのことに超教派で取り組みました。また安保条約改定を巡って国家が大きく揺れました。学生運動が激しくなったのはこの頃です。その流れで、教会のなかの青年たちも大きく揺れました。
ここに大きな落とし穴がありました。過激主義というものです。浅間山荘事件に象徴されるような暴力主義が横行したのです。中国の文化大革命、カンボジアのボル・ポト政権の大虐殺、北朝鮮のラングーン事件や、暴力支配が起きてきたのです。そのようなことが社会に関心をもつこととすり替えられていったのです。政府はそのことを見透しており、暴力主義を泳がせ、陰で支援さえたのです。当時曽根康弘首相は、ちゃんと言っています。「左にウイングをのぼすと、飛行機は右旋回する」と。
教会のなかにも暴力支配を許してしまう体質がありました。それにノーが言えないのです。「分かる。分かる。厳しい問いかけ」などと言う物わかりのよい、知識人や進歩的な人や牧師が少なくなかったのです。この結果、どうなるかと言うと、保守化するのです。体質改善をして世に出ることに消極的になり、観念的な議論ばかりが進み、具体的な取り組みからは遠ざかっていきました。元の心の世界に戻ってしまうのです。
教会をばっつばせ、礼拝は欺瞞だ、牧師を講壇から引きずり降ろせなどと言われても、へらへら笑っていた神学者や牧師の責任は大きいと思います。それは社会問題に取り組むことや、体質改善とは無縁のものです。こうして方向を失い、甘やかされ、希望を捨て、無気力・無感動・無関心といった若者たちが作り出されていった。若者だけではなく、社会全体がそうになっていったと思います。

北海道での平和運動

私は伝道師になるとすぐに、北海道キリスト者平和の会に入りました。そこで出会ったのが、恵庭（えにわ）事件、長沼ナイキ事件でした。恵庭事件と言うのは、北海道恵庭町で、自衛隊演習場の近隣で酪農を営んでいた農民が、騒音により牛乳生産量が落ちたことに抗議しました。「境界付近での射撃訓練については事前に連絡する」と自衛隊は確約していた。自衛隊にその確約を破られたことから、一九六二（昭和三十七）年十二月に自衛隊の着弾地点との通信回線を切断、防衛器物の損害（自衛隊法一二一条）で起訴されたという事件です。判決は無罪に終わりました。キリスト者平和の会はここで大きな役割を果たしました。

長沼ナイキ事件とは、自衛隊の合憲性が問われた事件です。長沼ナイキ基地訴訟とも呼びます。北海道夕張郡長沼町に航空自衛隊の「ナイキ地对空ミサイル基地」を建設するため、農林大臣が一九六九年、森林法に基づき国有保安林の指定を解除。これに対し反対住民が、基地に公益性はなく「自衛隊は違憲、保安林解除は違法」と主張して、処分の取り消しを求めて行政訴訟を起こしたものです。一番の札幌地裁は「平和的生存権」を認め、初の違憲判決で処分を取り消しました。国の控訴で、二審の札幌高裁は「防衛施設庁による代替施設の完成によって補填される」として一番判決を破棄、「統治行為論」を判示しました。住民側・原告は上告しましたが、最高裁は憲法に触れず、原告適格がないとして上告を棄却したのでした。

ここで学んだことは、平和運動というのは、暴力ではないということです。恵庭事件の原告である野崎さんは「私の平和運動は良い牛をつくることです」と言われました。ここに原点があるのです。学生運動とか、社会問題に取り組むというと、怖ろしい、体制を壊すというようなイメージのあるなかで、本当にそうなのか、もっと地味に真に平和を求め、楽しい明るい、弱い人が大切にされる社会を求めることができないのかという疑問がありました。農家をつぶしたり、田畑を踏み荒らしたりするのは平和運動ではありません。若い人たちと農家に入って、田植えをしたり、草取りをしたり、収穫したりすることで農業には、辛くて苦しいことがある。それをじっと我慢して堪え忍ぶところからよい実りがあるのだということ学びます。平和運動は人づくりです。

思い通りにならなくてよかった

平旦ではありません。八年勤めた北光教会を辞するときには、私を招いてくれる教会は日本中どこにもありませんでした。それで仕方なく始めたのが札幌北部教会の開拓伝道でした。八年間の経験は大きな力になりました。十四年の開拓伝道はとても多くの恵みがありました。そこで学んだことが「無くてはならない、決してあってはならないこと」でした。そこからこんな言葉が生まれました。

川は曲がりながら

私は曲がったことが好きだ
曲がっている方がいい
そこには優しさがあるから
川は曲がりながら大海に入る
あの村この里を潤しながら
自らを浄める
まっすぐだったら洪水になる
真理だってまっすぐじゃない
曲がりくねって一つの出来事になるのだ

私の思いではなく
思い通りにならぬことばかり
思い通りにならなくてよかった
思い通りになっていたら大変だった
私の思いより
神さまの御心が一番

御心を
うまくやるより
御心を
人に頼られることより
神に頼る信仰を

敬和学園高等学校で教育に携わるようになりました。そこで、生徒たちがとんでもないことをしてかしたり、あってはならないことに会ったりして、とまどったことは数え切れな
いほどであります。それらに出会ってちゃんとした大人になっている若者を見て驚くのです。その困難とどうつき合っていくかということが、その人の生きる力と言えるでしょう。
ある時生徒が謹慎を終えて、復学のために親と面接に来ました。「よくなったね」と言ってあげなければならない場なのですが、ちゃんと立ち直っていない。このままではだめと思
い、「もう一度家に帰りなさい」と言わなければなりません。とても悲しい気持ちにさせられたことを思い出します。「冷たい校長だ、それでもキリスト教の学校か」となじら
れた。でもこの子にはその堅くて冷たいこと、自分の行動に対する責任を教えてあげなければならない。「これはこの子にとって良かったことです」などと言ってはいけない。でもこ
の子には無ければならならなかったのです。

雪道を 復学求め来し親子、また出直せと告ぐる我かな

教会もまたこの四十年で、多くの苦しみや失敗を繰り返しています。しかしそれらは無くてはならない事々なのです。それをきれいに流し去ってしまっはいけないのです。そこら
ら学び取ることから体質改善ができるのだと思います。

二〇〇八年十一月五日 同志社スピリット・ウィーク
京田辺チャペル・アワー「奨励」記録